関係者各位

山田哲平「変容する世界についての三連作（一部）」

森夕香「砂漠の死者」

作 家 名：**山田哲平・森夕香**

展覧会名：**境界行為｜Liminal Acts**

会　　期：2024年12月13日（金）ー12月24日（火）
2025年1月10日（金）ー1月25日（土）

営業時間：11:00 -18:00［火 -土］　日・月・祝　休廊

○ オープニングレセプション：2024年12月14日（土）16:00~19:00

関係者各位

LOKO Gallery ではこの度、山田哲平（1979 年 -）と森夕香（1991 年 -）による二人展「境界行為｜Liminal Acts」を開催致します。映像やサウンド、写真やテキストなど様々なメディウムを用いた彫刻作品を発表してきた山田哲平は、中心と周縁、その双方を繋ぐ哲学や科学、美学を横断しながら、無意識と意識の領域や感覚と思考・認識のはざまを介して世界における多様な存在と向き合い、自己や他者、社会や自然、その現象としての出来事の痕跡をあぶり出してきました。

仏教美術の影響も受け日本画を出自とする森夕香は、自身の身体感覚と環境との関係性を主軸に、絶えず変化するその流動的な相互作用や、目に見える世界の枠を超えた感覚的な領域に自身の絵画の知覚を共鳴させています。植物のメタモルフォーゼや伝統芸能である能なども参照点とする森の画面には、日本画における図と地の関係性の探求を通した独自の形象が立ち現れます。

本展タイトルの一部である「Liminal」は、ラテン語の limen（閾値）から派生し、生理的、心理的、精神的な境界における中間領域を指す言葉です。人類学の理論にも紐つくこの術語には、二項対立が覆されることから派生する混沌や、混合性と不確定性、異質性や周縁性といった性質も挙げられるとされます。[1]中間的境界とはすなわち未分（みぶん）の領域です。文化人類学者のヴィヴェイロス・デ・カストロは、類似や対立、アナロジー同一性などの類型に還元されない差異の存在様態としてのそれを「一つのあいだ」と言及しています。その装置的性状はまた、一と多の関係において一方が片方に還元されることなく相互生成的に拮抗している場所[2]とも隣接しているようです。

身体や感覚器官と媒体としてのメディウムを接続する実践を通して、包摂し包摂されるという逆転の関係性を考察する山田は、本二人展において新たなシリーズ＜骨と拡張＞を発表します。平面技法のパースペクティヴを採用した三連作品には、真鍮による立体枠が施され、内側に配された平面形象の輪郭は何か有機形態を想起させます。彫刻の発想を持って絵画制作を試みたと話すフランシス・ベーコンの空間フレームにも触発されている本作には、彫刻性と触覚的なものを二次元に落とし込むという逆転が同時に存在しています。社会構造や規律、正義の論理といった人間が作り出した＜枠＞の擬態として提示される外側の枠組みと、多重露光で捉えられた雲や炎、流体運動の形骸である同一蠕殻による異なった輪郭から成る内側という二重の仕組みは、表層に施されたレンチキュラーレンズによる半透明な視界[3]と共に観者に距離と視点を要請し、作品は見る角度によって歪み、その位相を変えてゆきます。山田はまた、この一見抽象的に象られた平面体の内に意識や身体が延長された多様な生命もみています。そして彼が「開かれている」と話す三つの枠のパースペクティヴ、その「あいだ」には、未決定な領域が潜んでいるかのようです。

2019 年頃より植物をモチーフとした絵画にも注力してきた森は、対象生命単体だけではなく、それらが宿る空間全体を身体的に捉えた実践を続けています。そこでは様々な個や断片的な存在が複雑に絡み合い、時に管や内蔵をも想起させながら、その輪郭は流動し、滲み、交じりあっています。2024 年に発表した新作＜リゾーム＞では数千もの睡蓮が自生する池というサイトスペシフィックな条件の中で、水面に見える睡蓮の花と、水中に繁殖する無数の見えない茎の存在を描いています。大胆に配分された画面は上部一割に一輪の花が、残りの画面には母胎のように身体化した存在と複数の茎達が交接しながら揺らぎます。彼女の描くこのような未分（みぶん）の情景は、仏教の有情（意識あるもの＝人間・動物）非情（意識のないもの＝植物）の境界線を自然の領域へと大きく拡大した日本のアニミズム的思考や、『芭蕉』をはじめ境界を越えた人間と植物の連続性を主題とした能の演目とも共鳴しています。

採用するメディウムも属性も異なる森と山田。この二人の思考と行為の共有項を、彼らが主題とする事象の「境界」を基軸に示すならば、それは枠からの逸脱への希求と混交、そして拡張と変換と言えるかもしれません。内と外や有機的なものと無機的なもの、人工と自然といった二項対立構造が混在する世界で、彼らの作品は波動や循環などの力に突き動かされながら、ある種の抵抗の原理としてそこに生の湿度もたずさえた、感覚の形象を模索しています。それは解剖学[4]の手つきにも似て、場所（トポス）において、それら身体（のような）形態は振動し、ねじれ、時にはみ出し、歪んでゆきます。その不均衡は、変容が変容していくようなパースペクティヴ、視点の間の距離を持った強度的な差異への志向なのかもしれません。

（山越紀子｜キュレーター）

山越紀子 ｜インディペンデント・キュレーター、ライター。チューリッヒ芸術大学（キュレーション）修士。主な近年の展覧会に「Games.Fights.Encounters」（2020-2021）「Choreographing the Public」（2019-2020）、久保寛子（2023）、宇留野圭（2024）、共同執筆に「la_cápsula – between Latin America and Switzerland: An Exploration in Three Acts」（2020）、インタビューエッセイに「《MJ》田村友一郎」（2019）など。

1. この領域において、以下の文献では視覚芸術やパフォーミングアーツ作品と観客のあいだで生じるこのような感覚について言及しています。
『The Transformative Power of Performance: A New Aesthetics』Routledge, Erika Fischer-Lichte, 2008 年｜『Liminal Acts』Cassell, Susan Broadhurst, 1999 年
2. 『善の研究』西田幾多郎、岩波書店、2012 年
3. ここに、作品における触覚性への幾つかの道筋が読み取れるかもしれません。例えばベーコン作品においてある種の画面の撹乱として現れる櫛状の塗り、または、ブラー、低解像度、テクスチャ、視覚の遮りなどを手がかりに観者との関係を考察したローラ・U・マークスが提唱する「触感的視覚性」、そして『デ・アニマ』における、中間に介在するものとしての媒体など。
「触感的知覚の考古学」ローラ・U・マークス、『ドゥルーズ・知覚・イメージ 映像生態学の生成』宇野邦一編、せりか書房、2014 年
4. 解剖学者の三木成夫は両者共通の参照点となっています。森は自身の実践において三木の、植物の構造は人間でいうところの腸管を裏返しにしたような構造である、という記述にしばしば言及しています。また山田がこれまで「Inside Out」（2016/2023）や＜Différence de nature＞（2021）＜Pulse＞（2022）といった作品で採用してきた、多様な人々から採取した鼓動を可視化・触覚化した作品において、生物の蠕動運動と鼓動の繋がりなどが参照されています。

関係者各位

山田哲平　Teppei Yamada　CV

■ プロフィール
1979 年　東京都渋谷区生まれ
2009 年　広島市立大学芸術学研究科博士前期課程修了
現在は神奈川県藤沢市を拠点に活動

■ 主な個展
2023 年「Milky Way Orchestra」/ Hermes 表参道 (東京)
2022 年「Mæssage」/ LOKO GALLERY (東京)
2021 年「Différence de nature – 本性の差異 –」/ 日本橋ライフサイエンスビルディング (東京)
2020 年「The Dawn」/ TAKU SOMETANI GALLERY (東京)
2019 年「Open studio」/ Grey Projects　(シンガポール)
2016 年「なぞうするこころ–山田哲平展–」/ 広島芸術センター（広島）
2015 年「そのなかにも在るかもしれない」/ クリエイションギャラリー日本橋箱崎 (東京)
2014 年「自然の音に形を与える」/ 横浜美術館アートギャラリー１（横浜）　など

■ 主なグループ展
2023 年「OPEN STUDIO 2023」/ ART FACTORY 城南島 (東京)
2022 年「OPEN STUDIO 2022」/ ART FACTORY 城南島 (東京)
2022 年「オペラーカス」/ 藤沢アートスペース（神奈川）
2022 年「ON PAPER」/ TAKU SOMETANI GALLERY (東京)
2021 年「OPEN STUDIO 2021」/ ART FACTORY 城南島 (東京)
2021 年「第 24 回文化庁メディア芸術祭」/ 日本科学未来館 (東京)
2021 年「TAION」/ Spiral Garden (東京)
2021 年「サマーアートミーティング」/ Gallery TK2 (東京)
2021 年「ENCOUNTERS」/ 東急プラザ銀座 (東京)
2019 年「Shanghai International Digital Vision Exhibition “SHIFT+ MEDIUM”」/ base 佰舍 / 苏河 (上海)
2019 年「海外派遣員成果発表展」/ 秋吉台国際芸術村（山口）
2019 年「Aesthetica Art Prize Exhibition」/ York Art Gallery（イギリス）
2019 年「虚構のはずれ」/ 國立臺北藝術大學關渡美術館（台北）
2018 年「黄金町バザール 2018- フライング・スーパーマーケット–」/(横浜）
2018 年「The 23nd ifva Awards – Media Art Category Finalist Exhibition」/ Hong Kong Arts Center (香港)
2017 年「Season 3 Residency Artists Exhibition」/ 台北国際芸術村（台北）
2017 年「Jodori Khiang- Community Artfest」/ My Milly Zakka（台北）
2017 年「ナラティブのナラティブ アートのアート #2」/ 渋谷ヒカリエ Cube123（東京）
2016 年「ナラティブのナラティブ アートのアート #1」/ 横浜美術大学ギャラリー (神奈川）
2016 年「Art Album 2016 Existence」/ 藤沢アートスペース（神奈川）
2016 年「trans_2015-2016」/ 秋吉台国際芸術村（山口）
2015 年「アーツチャレンジ 2015」/ 愛知芸術文化センター（愛知）　など

■ レジデンス
2019 年　Grey Project / 秋吉台国際芸術村海外派遣　(シンガポール)
2017 年　Shoulang Artist Village / (台南 / 台湾）
2017 年　Taipei Artist Village / (台北 / 台湾）
2017 年　Bank ART AIR / Bank ART　Studio NYK（神奈川）
2016 年　藤沢アートスペース FAS レジデンスルーム　招聘 / 藤沢アートスペース（神奈川）
2016 年　trans_2015-2016 公募選出招聘 / 秋吉台国際芸術村（山口）　など

■ 受賞・助成
2022 年　山梨メディア芸術アワード 入選 / 山梨県 (日本)
2020 年　文化庁メディア芸術育成支援事業　助成 / 文化庁 (日本)
2020 年　文化芸術活動の継続支援事業 助成 / 文化庁 (日本)
2019 年　Present Future Art & Technology Star Award 最終候補者 / MANA (上海)
2019 年　The Aesthetica Art Prize 審査員特別賞 / The Aesthetica magazine (イギリス)
2019 年　第 22 回文化庁メディア芸術祭　審査員推薦作品 / 文化庁メディア芸術祭実行委員会 (東京)
2019 年　The Aesthetica Art Prize 最終候補 / The Aesthetica magazine (イギリス)
2018 年　trans_2018-2019 日本人アーティスト海外派遣 / 秋吉台国際芸術村 (山口)
2018 年　野村財団芸術文化助成 / 野村財団 (日本)
2018 年　The 23rd ifva festival, Silver Award / ifva(香港）
2018 年　北九州デジタルクリエーターコンテスト　入賞 / KDCC 実行委員会 (福岡)
2015 年　秋吉台レジデンスサポートプログラム公募招聘アーティスト
2015 年　アーツチャレンジ 2015　入賞 / あいちトリエンナーレ地域展開事業実行委員会 (愛知)
2009 年　広島市立大学修了制作優秀作品賞 (広島)　など

■ アートフェア
2023 年「Sydney Contemporary 2023」/ LOKO GALLERY（シドニー）

関係者各位

森夕香　Yuka Mori　CV

■ プロフィール
1991 年　滋賀県出身
2014 年　京都市立芸術大学 美術科日本画専攻 卒業
2015 年　パリ国立高等美術学校 派遣交換留学
2016 年　京都市立芸術大学大学院修士課程 日本画専攻 修了
2019 年　京都市崇仁市営住宅第 32 棟において「市営住宅第 32 棟美術室」を開設

■ 主な個展
2024 年　「森夕香 展」滔々（岡山）
2023 年　「森夕香 展」滔々（岡山）
2021 年　「雨中の肖像」同時代ギャラリー (京都)
2020 年　「一木一草」Kaikado Café (京都)
2019 年　「蔓延る脈」GALLERY SUJIN 元崇仁小学校 (京都)
2018 年　「湿った午後の黄色い部屋」同時代ギャラリーコラージュ（京都）
2017 年　「明ける Dawning」LOKO GALLERY（東京）

■ 主なグループ展
2024 年　「森の芸術祭 晴れの国・岡山」（岡山）
2024 年　「ART RHIZOME KYOTO」Hotel rings kyoto（京都）
2024 年　百瀬玲亜森夕香二人展「萌芽」日本橋高島屋美術画廊 X（東京）
2024 年　「TRILOGY」Numero.51 Concept Gallery（イタリア）
2024 年　「Kyoto Art for Tomorrow 2024 – 京都府新鋭選抜展」京都文化博物館（京都）
2022 年　「アーティスト・イン・レジデンス・プログラム」（滞在制作）アートビオトープ那須（栃木）
2022 年　「京都市立芸術大学移転整備プレ事業 POP UP @KCUA」@ 堀川新文化ビルヂング
2021 年　「瀬沼健太郎・森夕香 二人展」滔々（岡山）
2021 年　「流転するあいづち」森夕香 、西條茜　二人展　LOKO GALLERY（東京）
2020 年　「ドローイング展」LOKO GALLERY（東京）
2020 年　「日本画新展 2020」美術館「えき」KYOTO ホテルグランヴィア KYOTO　(京都)
2016 年　「internal←→external」森夕香　戸張花 / LOKO GALLERY（東京）
2016 年　「stART2016〈からだ | マインド〉」グループ展 / ギャラリー 16（京都）
2016 年　「Salut, la planète!」パリ国立高等美術学校内ギャラリー（パリ）
2015 年　「京都銀行美術研究支援制度選定 京銀コレクションの 15 年ー美術支援制度 15 周年記念展示」京都銀行桂川キャンパス（京都）
2013 年　「京都芸大日本画の現在 – カリキュラム展」ギャラリー @KCUA（京都）

■ アートフェア
2024 年　「ART FAIR TOKYO」東京国際フォーラム / KANEGAE gallery（東京）
2024 年　「ARTIST’ S FAIR KYOTO 2024」京都国立博物館（京都）
2023 年　「Sydney Contemporary 2023」/ LOKO GALLERY（シドニー）
2022 年　「ARToVILLA MARKET」FabCafe Tokyo（東京）
2021 年　「DELTA 2021」シーサイドスタジオ CASO（大阪）
2019 年　「NEXT」Sydney Contemporary 2019 / LOKO GALLERY（シドニー）

■ 挿画
Suujin Visual Reader 崇仁絵読本（京都市立芸術大学ギャラリー @KCUA）

■ アワード
2024 年　「Pommery Prize Kyoto 2024」最優秀賞